江西一三とその時代（上）

向井　孝

この稿は、江西氏が提供されたメモと談話の聞きとりをもとに、その前半すなわち大正十三年二十三才で大阪をはなれ、上京するまでをまとめたものである。

それ以降の　むしろ本稿の中心ともいうべき〈大崎居本稿時代〉〈深川富川町時代と無軌道社〉〈反政党新聞〉〈全国自連結成と分裂〉〈扇橋・猿江・柳島時代〉〈その他日本染織・東京ロール・日立亀戸争議・大島共同社…等々アナ運動史として貴重で得難い記録をふくむ部分は、もっぱら（下）で展開されることとなる。

上・下の分載は、紙数不足の関係もあるが、実はぼく自身に予備知識が不足していて、充分にまとめえないという実情もある。若干勉強をした上で、次回にそれをかくということで、前半のむしろ〈序〉の部分のみで終っていることをおわびする。

I　生いたち

江西一三が生れたのは、一九〇一年（明治三四年）十二月五日、大阪市浪速区、通称赤手拭いなりの近くで、職人や労働者がすむ下町の一角であった。

父、鶴吉は四国阿波の出で、紺屋の染物職人である。母は宮崎こゆきといった。彼女は香川県木田郡氷上村に生れたが、親のきめた縁談がいやで大阪へ出奔し、たまたま奉公した先で鶴吉と知合った。同じ四国の出であるということもあって、結ばれて一緒になったのであろう。

まもなく母こゆきは、十九才で長男一三を生んだ。父母双方ともが、それぞれ長男と長女で正式な入籍ができなかったので、庶子の届出だった。また八つちがいで生れた弟は、母方の姓をついで、宮崎政吉を名のった。

もともと父がしがない職人だった一家は、裕福であるはずもなかったが、一三が小学三年生のとき父の夭折によって、たちまち赤貧のどん底へおちこんだ。

一三は十才、政吉は乳離れもせぬ二才の幼児である。

まだうらわかい母親は足手まといの二人の子をのこされて、どうしようもない思いで途方にくれた。幼い日の一三の思い出には夜も昼も弟を背負って、内職に必死にはげむ母親のなりふりかまわずやつれて淋しげな、その横顔がきざみつけられている。

もちろん今までの家は引越して、知人の家の四帖半一間を間借りしてのくらしであった。

母親がやる模造真珠のガラス玉に糸を通し、ヤスリで切って仕上げる　その内職は、着のみ着のまま倒れるように数時間仮眠して、またやり初めるほど一日中励んでも、まだ食べていくにこと欠く安い工賃でしかなかった。

一家のくらしは、一三が学校へもっていく月十銭たらずの費用さえどうしようもないほど窮迫していた。金がなくて登校をしぶる一三を、明日は何とかするからとなだめすかす日がつづいた。

とうとう思いあぐねた母親は、或る日学校をたずねて、一三の退学を申し出た。その結果、ともかく一三は、学校があつめる費用が免除されることになった。しかしそれもまた、特別扱いされることで、子供心に肩身のせまい日々ではあった。

もちろん月十銭の費用が免除されたといっても、学用品代もいれば小づかいもいった。それ以上に一家の生活を、子供なりに助けねばならなかった。

一三は、道頓堀の相生橋のたもとで、毎日夕刊売をやった。

雨風の日は、売れ行きもわるく、立売り場所もなかったので夕刊売りは休みであった。一三は子供心に、毎日雨がふることを待ちのぞんだ。

冬の木枯しの日などはとくにつらかった。

丁度そのころ橋角に「うなぎのいづもや」が建った。そのあたたかな煙が流れてくると、まだ食べたことのないうまそうな匂いが、空き腹に一しお身にしみた。

道を往来する人に、「夕刊、夕刊」と叫んでまつわりながら――しだいに暮れてくる夕闇のなかで、新聞がみんな売れるまで、いつまでも立っているのだった。その夕刊売りは、一三の卒業する日までの三年間つづいた。

難波第六尋常小学校を卒業すると、待ちかねたように丁稚奉公に出た。はじめは小間物屋であった。ガスのにおいがすると、内職をしている母をおもい出して逃げて帰った。奉公先を何度もかえたが、家恋しさでなかなかつづかなかった。

弟がようやく母の手から放れるようになって、母は道頓堀浪速座の売店に働きに出ることとなった。

その母を手伝って、一三もまた浪速座で仲売りをやる

ことになった。幕間に客席をあるいて、「エーオセンにキャラメル、ラムネにアンパンはよろしいか……」というあれである。一三は何よりも母親と一しょでおられるのがうれしく、こまめに働いて、みんなから可愛がられた。

その仕事の関係で、一三は芝居を毎日みてくらした。そして筋書きのなかにでてくる、しじみ売りの少年がこごえた手に息を吹きかけながら、「しじみーい」と呼んで歩くのをみると、夕刊売当時を思い出して自分のことのように涙をうかべた。そのころの一三は女の子のように気立てがやさしく、内気でおとなしい少年であった。

Ⅱ　米騒動

そのような彼が、思いがけなく生れてはじめて、警察に拘留されるという経験をすることとなった。

一九一八年（大正七年）八月、彼が十七才、世にいう米騒動のときのことである。

さて、大正三年に勃発した第一次欧州大戦は、日本に未曾有の好況をもたらした。もうけにもうけた戦争成金が、料亭の玄関で自分のはきものを探すため、ローソク代りに百円札をもやした　という気狂いじみた話がいまも残っているほどである。その一方で物価は暴騰し、奸商の買占めが横行して、庶民は生計に苦しまねばならなかった。なかでも米価の騰貴はすさまじかった。すでに一九一五年（大正四年）米価調節の勅令公布、米価調節調査会設置などの政策が打出されていたが、何の役にも立たなかった。一九一九年七月、急騰のため各米穀取引所は一時立合停止。さらに八月二日のシベリア出兵宣言は、その騰勢に油を注いだ。先きを見越した米問屋は買占めを急ぎ、かつ売り惜しんだ。天井しらずの米の値段は一升（一・五キロ）二十銭たらずだったのが、みるみる四十銭になり、五十銭になった。

こうして、まず富山県滑川の婦人仲仕たちの「米売れ運動」から、わずか数日間で全国に飛火して米騒動がはじまったのである。

大阪でのさわぎは、八月九日朝にはじまった。西成、今宮町の米屋が、米の先高を見越して早朝から店を閉じ、販売をやめてしまった。その日ぐらしで、五合一升と米を買っていた付近の住民は、納まらない。百余人が同店をとりまいて不穏な形勢となった。警官が駆けつけ、群衆を追いちらして一応平静になったものの、不満は消えたわけでない。とうとう十一日の夜に至って、隣接の町村をもまきこんだ大規模な騒乱が全市的におこった。

当夜、天王寺公会堂で米価調節市民大会がひらかれる

ことになっていたが、この日午後三時ごろ、今宮町住吉街道の米屋の前に男女三百人ぐらいが集まって、一升五五銭になった米を「二五銭で売れ」という強談判を行なっていた。

「もう米は一粒もおまへん」と断る米屋に、「あるかないか、そんなら見せてみい」と数十名が店を打ちこわして乱入したのがきっかけであった。ついで、数をました群衆は三隊に分かれて七米店をおそい、口々に「二五銭で売れ」と叫びながら、米を持ち去っていった。

そのころ、市民大会は超満員だった。入りきれぬ市民は木によじのぼったり、会場をとりまいてさわいでいた。「湊町の住友倉庫に米が一ぱいつまっているぞ」と誰かが叫んだ。わあっと、群衆は流れうごき出した。

すでに住友倉庫前には、大阪師団が繰り出され近よれない。周りをとりまいた群衆の突撃は、何度も空砲の威嚇射撃や剣付鉄砲で追いかえされた。続々集まってくる群衆は業をにやした。気勢をあげて他の目標をねらって市内各地の米屋へ殺倒していくことになった。

米屋はかたっぱしから次々に襲われた。警察の力はもはや及ばなかった。逮捕者をとりかえすため、九条署へ五千人の群衆がおしかけて包囲した。市内各所で電車がとめられた。下福島や日本橋では、出動してきた軍隊と竹槍をもった群衆が衝突、双方とも多勢のけが人をだした。

八月十四日、ついに大阪府知事は夜間外出禁止令を出し、市電も全線運行休止の措置に出た。新聞は記事差止めとなった。こうしてようやく十五日になって、この大阪の米騒動は、参加者のべ60万～80万人、約五百箇所での騒擾、死者二、重傷九、軽傷三七〇名、検挙された者二三〇〇名、起訴者五一一名という未曽有の数字をのこして鎮静化したのである。

× × ×

当時、一三の一家は浪速区の舟出町にすんでいた。八月十三日の夕方、にわかに表どおりがさわがしくなった。前の大きな炭屋に、二・三十人の人がむらがっている。人数はみるみるふえていく。誰か一人が屋内にはいって何か交渉しているらしかった。と待ちきれぬとばかり、数人が屋内におどりこんだ。みんながウワーッとあとにつづく。とたんに炭俵の山にのぼったやつが、一俵づつ崩して、道路へほうり出しはじめた。

オカミさんや子供まで交った連中が、炭俵をほどいて、てんでに袋やフロシキの中につつみこむ。一俵まるごと担いでいくのもいる。もう手がつけられない。アリの大群がむらがるように、家の中はみるみる空っぽになって

しまった。

「もう、何もないぞー」「こんどはどこや」「××へいこう」「おーい、みんなこっちやぞー」

群衆はときの声をあげながら、再び走り出す。

家からとび出してきた一三は、いつしかその興奮の渦のなかにはいっていった。一しょに叫んだり走ったりして、その中の一隊のあとをついてまわった。人数はどんどんふえて何千という数になった。それが途中でわかれたり、また四つ角で合流したりしながら、手当りしだい米屋、酒屋、炭屋をもとめて、襲いかかった。

誰かが大声で「あゝ腹へったナ」といった。それをきいて、はじめて一三は、無我夢中で夕飯さえたべていないのに気がついた。

天王寺の西門あたりの坂道をだらだら下っているときであった。

時刻はいつのまにかもう十二時をすぎていた。人数も一人へり二人散って、みまわすと三十人ばかりの黒い影になっていた。「もう帰ろう。母親が心配してるやろ…」と一三が隊列をはなれようとしたときだった。

横丁で呼子が鳴りひびいた。暗がりにひそんでいた四五十人の警官隊が走ってきた。とびかかってきて、つき倒し、にげる奴に足払いをくわして押えつける。あっという間もなかった。一三は高小手にしばられて、気付くと他のものと珠数つなぎになっていた。天王寺署へ連行されてみると、それでも大半のものは逃げたらしい。つかまったのは、みな中年の職人や労働者で、十人ばかりだった。一三だけが目立って若かった。ブタ箱は、まるで四方が壁の箱の中と同じであった。外の世界からくる唯一の気配は、時々、ジャラジャラという看守巡査の腰のカギ束の音だけだった。

朝、水にひたしたようなべちゃべちゃの麦飯が出た。空腹だったが、のどを通らなかった。二切れついたタクアンだけをやっとたべた。と、まもなく呼び出された。とても簡単に釈放してくれそうにもない……と、主任の説教をききながら、うつむいてあれこれ思いをめぐらしていると、とつぜん「では帰ってよろしい……未成年であり、とったものを何ももっていないので、今回は特別大目にみてやる」といった。

そして、天王寺署の玄関を出るや否や、一三の足は追われてもいないのに思わず早足になり、走り出していたのである。

このときの思い出は、一場の悪夢のように、ほとんど一三の意識に何をものこさずに過ぎたようであった。にもかかわらず、あの大声をあげて走りまわったときの

快感が、時々よみがえって、血が沸くおもいにかられることがあった。そして後年になって一三は、それが内部におしこめられて出口をもたなかった　あの大杉らの言う〈反逆の精神〉にほかならぬことに、ようやく気付いたのであった。

また別の意味で言えば、日頃内気で気立のやさしい少年すらも、そのようなときどうであるかを物語るものとして――いわゆる大衆の暴動の性格と内容の一端を示唆する――興味深い問題でもある。

Ⅲ　久保田鉄工所に入る

何とか一人立ちして、商売をおぼえさせようと、母親は一三に、いろいろな仕事をすすめた。いまもある難波病院（その頃通称おやま病院といった）の塀のところに屋台をおいて、トモエ焼き屋をやったこともあったが、長くはつづかなかった。一三があれこれ走り使いや雑仕事にしているのをみて、近所の知人が話をもってきた。その知人が運搬工組長をやっている久保田鉄工所で働かぬかという。

そのころ、不況は一層深刻化し、働くにも職がないという時代だったからこれは思いの外の話である。

こうして一三は、ふとした過然から久保田鉄工所の、運搬工雑役として働くこととなった。一九二一年（大正十年）彼が二十才のときである。

さて、大正十年と言えば、その前年に創立された〈日本社会主義同盟〉の成立（十年五月命令により解散となる）にみられる社会主義運動のひろがりと、ようやくそれと結びついた労働組合運動におけるサンジカリズムの浸透、ロシア革命の影響もあって、アナとボルとの対立がしだいに表面化してきた年である。一方、第一次欧州大戦景気で異常に拡大発展した日本経済は、その発展が急激で大きかっただけにどの国よりもきびしい反動恐慌に襲われることとなった。大正九年にはじまった物価の急落、消費減退、ついで中小企業の操短、休業、首切り、倒産が続出した。（大阪では大正九年二月から四月末までに、工場閉鎖二〇〇工場、三五〇〇人の解雇、と記録にある）

大正十年になると、中小企業だけにとどまらず、大企業でも人員整理が頻々と起り、それに対抗して、労働者側は八時間労働制、日曜公休制、団交権確立、産業管理権獲得などの攻撃要求をかかげて首切りと斗い、いまも語り伝えられる大争議が阪神地方でおこったのであった。

すなわち四月から五月にかけての〈大阪電灯会社の争議〉、つづいて〈田中機械製作所・川崎鉄工所〉五月から六月にかけて〈藤永田造船所〉六月から七月にかけて〈住友・伸銅電線・製銅三工場〉、そして七月から八月にかけては神戸の三菱、川崎造船所において労働運動史上空前ともいうべき大ストライキが斗われた。またこの年十正十年五月一日、第一回大阪メーデーが挙行され、五千の労働者が中之島公園に参集、長蛇の列をつくって天神橋から松屋町筋をまっすぐ南下、天王寺公園までデモ行進をし、はじめて公然と街頭での示威を行ったことで、また銘記される年でもあった。

（余談をつけ加えれば、このメーデーに信友会の桑原練太郎（彼は労働運動社大阪支局へ東京から応援に来ていた）が「今これから争議中の大電へデモを組んで殺倒しよう」と緊急動機を出したが、議長がこれを無視したので、解散間際にイザコザが起った。結局動機提出が許され、メーデーが一たん解散したあと、『電業員組合、造船工組合所属職工ならびに大杉一派の社会主義者など百三十名は、天王寺公園から再び中之島の大阪電灯会社門前に至り、革命歌を高唱、攻撃演説をはじめたが、警官に中止を命ぜられて、六時すぎに散会した』と新聞に報ぜられている。）

さて、一三が入職した久保田鉄工所は、坂本孝三郎を組合長とする大阪鉄工組合の傘下にあって、その中心ともいうべき大支部であった。（坂本孝三郎は、大阪汽車会社につとめていた大正五年ごろ、友愛会のようにインテリや学者などに指導されるのでなく、労働者自身の組織をつくるべきだという考えで、同じ会社の堂前孫三郎や、住友伸銅の西尾末広とはかり、〈職工組合期成会〉をつくった関西における労働運動の先駆者リーダーである。大阪鉄工組合は、その期成会の後身ともいうべき性格をもち、したがって関西における反総同盟系の中心であった。）久保田の従業員は、ほとんど組合員だったので、一三もまた当然のように組合に加入した。しかし組合員になったといっても、何の知識もない彼にとって、入社当時各所で行われたストや諸斗争も、ほとんど関心なく新米の雑役工として日々を働らくだけにすぎなかった。そして一三は、半年あまりのあいだに仕事を覚え、やがてグレン工になった。グレンの運転は、動かすとき気をはりつめて注意を集中しなければならなかった。その代りに手待ちや交代、休憩があって、いままでの追いまわし雑役とくらべ、はるかにらくだった。

そのころの労組は、どこでも組合員の散髪割引券を出したり、作業服を安く斡旋したりといった　いまでいう生協分野のことを、日常活動としてさかんにやっていた。久保田鉄工所労組の支部長は広田といい、坂本孝三郎の

実兄たったが、彼はまた、その消費組合の責任専従者だった。消費組合は、小さな店を構内にもっていて、日用品の軍手や八ツ割レ（板裏ゾーリ）手拭などをならべて売っていた。ある時、

ある時、一三が買物にいくと、広田はひとりで店番をしながら、本を読んでいた。いくら呼んでも返事しないほど熱中している。なんども声をかけて、やっと気付いて顔をあげた。

「なんかムズカシそうな本ですねえ」と話しかけたのがきっかけだった。

興奮した面持ちで、広田支部長は言った。「この本を書いた幸徳秋水という人は、十数年前、大逆事件で死刑になった人や。世の中を変えて、貧乏や不平等をなくし、みんなが楽しくくらせるようにしようとして、大塩平八郎や佐倉宗五郎のように、犠牲になった主義者や。それで政府は主義者を一層弾圧するようになったけど、一方ではもっと貧民救済に力を入れねばアカンことに気付いた。それからいろんな社会政策　孤児院などの施設がつくられるようになった。たとえば済生会病院などができて、いまそれを利用してわしらが助かっているのもそのためや。」「労働者もこれからは勉強せなあかん。きみがそんなに時間があるのやったら、何より本をよむこっちゃ。世の中をかえるためにどうしたらエエか、それがここにかいてある……」そして、まず貸してくれたのが、幸徳訳の〈パンの略取〉であり、つぎに大杉栄の〈相互扶助論〉であった。はじめ何となくとっつきにくかったその本は、よみすすむにつれて一三を全く新しい世界へと導いた。一頁一頁がおどろきであり、新鮮な感動が一三をとりこにした。彼はむさぼるように本をよみ、夢中で又、よみつづけた。そして数ケ月たったある日、ふと眼をあげてあたりを見まわすと、昨日までの周囲の景色が、まるで一変しているのに気付いたのだった。こうして一三は、社会主義ーアナキズムを知った。そして自分をも含めて、多くの労働者の上にのしかかっている貧困と抑圧に対して、斗う決意がしだいに固まってきた。しかし、一三が労働者として、行動にすすみ出るようになったのは、それからしばらくのちのことである。

一三は丁年に達していた。徴兵検査は第二乙種だった。（その頃の彼はやせて背が高く、ほっそりとして弱々しい美青年だった）入営をまぬがれた解放感は、彼の目を積極的な活動へと向けさせた。

大阪鉄工組合の生野益太郎は、そのころ〈熱血団〉を組織していた。いうなれば組合青年部のいまでいう青年行動隊である。

熱血団の目的は、労働者がともすれば労組の中にだけとじこもりがちな傾向を打破して、革命思想を積極的に学習し、労働者が果さねばならぬ社会的行動を実践することであった。一三はすすめられるままそれに加わった。

熱血団は独自で集会や講演会をひらいていた。また外部に争議があると、よく応援に出かけた。

ビケをはる手伝いをしたり、社長宅前にすわりこんだりするのである。その頃の応援風景といえば大八車に寵城スト団救援の米俵や薪をつみ、そのかますの上に軍用米二十俵などと書いたプラカードを押し立てて、市中を行進して行く。示威行列や屋外集会など一切を禁止されていても、米や漬け物といった生活必需品の運搬ということになると、警察もきびしい手だしができなかったので、わざわざ社長や重役の私宅の前をデモって気勢をあげるのだった。

やがて一三は、青年部の副部長におされた。昼間は職場ではたらき、夜になると演説会へ聴きに出かけるのが日課になった。当時は、どこかで毎日演説会や集りがあった。何もあてのない時は、天王寺へいくとかならず公会堂で何かがひらかれていた。そのころ加藤一夫の自由人社が、大阪で演説会をひらいたことがある。

その日は、午後から土砂降りの雨であった。それでも会場へいくと、程々の入りで、加藤が司会をし、ちょうど室伏高信がしゃべっているところだった。その話が終りかけたころ、にわかに玄関の方が騒々しくなった。

いきなり会場の真中へおどりこんできた男が、

「オレは抹殺社の石黒ダァー」と叫んだ。

びしょぬれの雨合羽をまとい、するどい眼をして、あごひげを生やしているのが印象的だった。

すぐそのあとから巡査が走りよってきて羽がいじめにする。演台へゆかせまいとねじふせる。さんざんてこずったあげく、とうとう彼を連れ去っていった。一三はそのときはじめて、石黒総一郎のすがたをみたのだった。そしてまた加藤一夫や高尾平兵衛の名を聞き、大阪に逸見吉三という主義者がいることを知ったのである。

Ⅳ　大震災の前後

一九二三年（大正十二年）二二才の一三にとっては、波瀾と興奮にみちた青春の日々がはじまろうとしていた。

その前年九月三十日、天王寺公会堂でひらかれた全国総連合の混乱決裂によって、労働戦線は全国的に総同盟系（中央集権派）と反総同盟系（自由連合派と中立派）の二つに分かれ、両派は互いにはげしい対立をみせていた。大阪では、〈関西労働組合同盟会〉が、大阪鉄工組

合、関西紡績、向上会など中心に組織され、総同盟に対抗して活動していた。その対立抗争を反映して、街では総同盟と反総同盟系が、またアナ派とボル派が、連日のようにそれぞれ問題をとらえて、市内各所で演説会をひらいていた。当時の集会や演説会は、かならずと言えるほど警察官の干渉があった。金ピカの警部が臨席していて「注意！」「注意！　論旨かえろ！」「弁士中止！」はては「解散！」と、サーベルでガチャガチャ床を鳴らして叫ぶ。聴衆が「警官横暴」とさわぎだすと、入口に待期していた二、三十人の巡査が、どっとなだれ込んで目ぼしい連中を逮捕しようとする　ということでいつも大さわぎになった。また一面さわぐのが面白くて、野次馬半分で声援する市民も多く、会場はたいがい満員だった。

そのようなある夜、同盟会の演説会があって、一三もその弁士をやることになった。生まれてはじめて人前に立つのである。昼間グレンの中で、一生けんめい原稿をつくった。何度も声を出してよんで練習した。いよいよ順番がきた。一三はナッパ服（青い詰襟の作業服で青服ともいった）すがたで演台にたった。

「われわれの運動は…野にさくレンゲ草のようなものである。…いくら泥靴でふみにじられても…やがて春がくれば花がさく…。われわれの声が、いまどのように打ち消されようとも、やがてはかならず革命のほのおとなって…」

とぎれとぎれに一三が「革命」といった瞬間、

「弁士中止！」「解散！」の声がとんだ。

たちまち、警官がとびこんで来て、みんなを容赦なく追い出そうとする。怒号が一斉おこる。小ぜり合いが乱斗になった。

そのどさくさのあげく、一三はとうとう検束され戎橋署へ連行されるはめになった。

米騒動以来、二度目とは言いながら、突然のブタ箱入りである。こんどは騒きの直接本人であるし、一体どうなることかと一三はにわかに心細かった。と、横のカベにもたれていた青年が、「きみ、こんなとこに　あまり慣れてへんのやな。」と低く声をかけてきた。彼も演説会でやはり検束されたらしい。大分あばれたのか、服が少し破れている。一三より小柄で年下のようなのに、意外に落付いていて頼母しかった。「心配せんでええ。ぼくにまかしとき…」

このいかにもブタ箱なれのした白皙の青年は、久保譲であった。

労働者の一三は、はじめてこのときいわゆるアナキストと呼ばれる人間と声をかわし、親しく知り合ったのだ

だった。そして自分を何くれとかばい、勇気づけてくれた。この久保譲との最初の人間的な出合いをきっかけに逸見吉三の家をたずねたりしてアナキズム運動へ近づいてゆくのである。

ここで久保譲のことに少しふれておこう。彼は、大阪でも有名な老舗「やぐらずし」の二男坊に生まれた。その生家がふだんから警察に、よくつけとどけをしていたので、差入れはもちろん、取扱いも寛大で、いっしょにはいった同志も大いにその余禄にあずかったという。

彼は十四才で家出上京。十六才ごろから社会主義に関心をもちはじめ、苦学しながら明治大政経学部に学んで、学内に「オーロラ協会」をつくった。大正九年、大杉の〈労働運動社〉をたずねて、アナキズムに近づき、早大の中名生幸力らの〈五月会〉を知り、〈第二次労働運動〉〈小作人〉などに参加したり、学生ストライキを組織したりした。

大正十一年二月過激思想取締法案に対抗して、非合法でタブ四頁の〈黒〉を藤岡、逸見らと共に発行した。その編集人として起訴され、堺刑務所に入獄、約半年の獄中生活を経験した。大正十二年春、明治大学を卒業、アナキズム運動に専念する決意で大阪に定着し、自連派の関西組合同盟会のなかで活動をはじめた。（一三と留置

。一九三〇年代における
日本アナキズム革命運動
『晨村青年社運動史』
A5上製函入　三二〇頁
一八〇〇円（『一四〇円）
ファシズムの抬頭する昭和六年自給自足を基礎とする『自由コミューン』の横立をもって、全国革命を目指し、治安維持法による一斉検挙によって潰滅した「晨村青年社」の運動をはじめて明らかにする
十年の歳月を費して収集した資料！
運動の殆どすべての文献を収録！
東京都三鷹市井の頭四の四の七三
『晨村青年社運動史刊行会』

場で出あったのは丁度このころだろう）その後、「黒社」によって関西自連の結成（大正十三年）関西黒旗連盟（大正十四年）の設立に力をつくし、その理論的中心として、各紙誌に寄稿、筆陣をはった。全国自連（昭和三年）分裂に際しては、その反サンジカリズム的傾向を批判する立場に立ち、関西自由新聞を発行する一方、〈クロポトキン全集12巻〉の編集などにたずさわった。昭和五年、鍼灸師の資格をとって、釜ヶ崎などで労働者の治療に力をつくしていたが、昭和十年、フランスへ脱出した。フランスでは、鍼灸治療の紹介者として著名となり、国立病院に勤務しつつ、大戦中も安南独立運動などを援助しつづけた。

昭和二一年帰国、二十二年上京して、日本アナキスト連盟機関誌「平民新聞」の無給編集専従者となった。その休刊後は広島にうつって、〈広島平新〉を栗原唯一の助力で発行。さらに岡山に移って、藤井信一の助力で〈岡山平新〉を刊行するなど、たゆみない活動を一貫してつづけた。一方、海外アナキズムの運動と理論の紹介につとめ多数のパンフを著述している。

昭和三六年十一月十六日、彼は、関西における、またとくに戦後日本のアナキズム運動の上で、数えようもない多くの仕事と業績をのこして、宿痾の肺結核のため貧窮のうちに死んだ。五八才であった。）

後記

三号は九月発行のはずだったが、編集責任者が二カ月近い欧州旅行でおくれた。四号をつづいて年内にも編集（できれば発行）したい所存でいる。今号は雑記が少い。同人全員の名がいつも載るようにしたい。ヴォリュムのある二編で頁数がふえた。量が多いから読みごたえがあるとはいえないだろうが、「江西一三（上）」（向井）は本人の直接の談話からまとめた努力の一編。生きた「アナキスト運動史」である。次回が待たれる。

（前田）